

これからの幸せ 第3回 in 仙台

2023年5月16日(火) 電力ホール | 主催 浄土宗 後援 河北新報社

第一部 講演

古市 憲寿(社会学者、作家)

第二部 座談

小川 さやか(立命館大学教授、文化人類学者)
大江田 紘義(定義如来西方寺住職、教諭師)
古市 憲寿
戸松 義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



「若者の幸福度が高いのは“諦め”の裏返し? (古市さん)

古市憲寿さんは「幸せとは、他人と比較して感じる相対的なもの」と指摘しつつ、著書『絶望の国の幸福な若者たち』(2011年)の執筆で得た考えを語ります。全世代対象のアンケートをとると、若い世代と高齢世代で「幸福度」「生活満足度」が高くなるといいます。「人生経験も重ねた高齢層は、いい意味で“諦めを覚えた”ことの反映かと思いますが、若い世代については、齢を重ねる前から“諦めている”ことの裏返しではないか…」これには時代的背景があるといいます。

「浄土宗が開かれた12世紀後半は、古代以来の律令体制が壊れ、権力が分散した時代。同様に、現代も、国家の存在感が低下して20世紀的な常識が崩れ、価値観が多様化しています」

旧来の規範から自由になったが、それは先の見えない不安定な状況でもあり、それを感じる若い世代は“そこそこの満足”で諦めているのではないかと。よりよい未来が見えるなら「現状に不満」と答えるのではないかと。



「自分にとっての幸せ」を軸に

幸せは相対的なものだからこそ、「自分にとって幸せとは何か」という軸が大切だと古市さんは続けます。「そのときそのときの自分の心に正直であることです。『他人に嘘をつけるけど自分にはつけない』と言いますが、直感的に“いい”と感じたことは誤魔化しようがない。それを核に行動を組み立てれば“幸せの軸”になる」。

イヤな人、嫌いなことは“サンプル”として客観視しよう。俯瞰すれば気にならないし、むしろ面白がれる。「コロナ禍を経た今は“自分の幸せ”は勿論、“社会の幸せ”も考えるべき時。そのためには、やはり仲間が大事な…でも大切なのは友の数ではなく、色んな仲間がいること。様々な居場所を持つことだと感じます」と締め括りました。

「贈与」しあうことで、自分の分身があちこちに生きている社会 (小川さん)

司会を務める笑い飯・哲夫さんの小唄「幸せがたり」を経て、第二部の座談です。文化人類学者の小川さやかさんは、長年研究してきたアフリカ・タンザニアの行商人たちの「贈与」という営為から幸せの形を提言します。「タンザニアの行商人たちは周囲の人たちに盛んに『贈与』をしあいます。これは彼らの“投資”であり、様々な人に『贈与』して生計を多様化することが、結局はリスク回避、ひいては幸福につながるかと考えるんです」富を現金ではなく、人間として貯蓄する

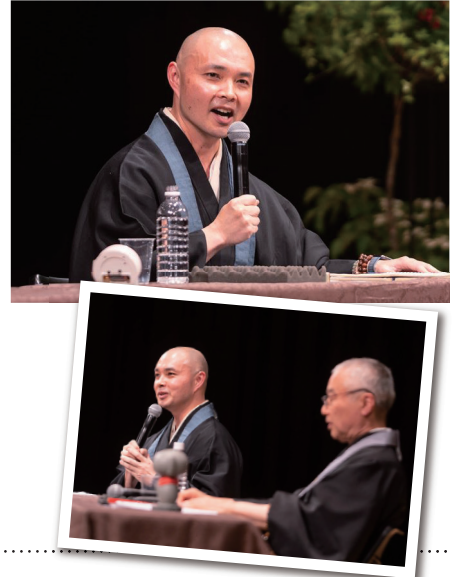
「人間貯金」と小川さんは表現します。フランスの文化人類学者マルセル・モースは、「贈り物に返礼がなされるのは、贈り手が自分自身を“分身(=霊)”として与えているからだ」と論じていますが、それがタンザニアの商人社会にも存在し、機能しているのです。人生は「縁」と「起」で成り立っていて、私は今ここにいて同時に、私の分身が様々な人生に付着してあちこちで生きていると想像できる…そのような社会に幸せがあるのではと、小川さんは語りました。



「祈り」と「自然」から幸せと出会う (大江田さん)

地元仙台的定義如来西方寺の住職・大江田紘義さんは、自分にとっての幸せは「祈り」と「自然」だと語ります。ウクライナ侵攻を受けて、西方寺では昨春からお昼に5分間の「平和の祈り」を始めたそうです。参加する人はどんどん増えていき、「最後、お念仏を唱え終えたときの皆さんの表情や雰囲気から、本当に幸せな感じが伝わってくる」といいます。そして、浄土宗ホノルル別院に6年間勤められた際の経験を語ります。

「檀家で80代の日系3世の方が、『困ったことがあったらビーチに行きなさい』と言うんです。試しにビーチに行き、波の上をぶかぶか浮かんでみると、何か大きなモノに包まれている気がして、すごく幸せな感情が押し寄せてきました」 「祈り」や「自然」を通じて人の心に「安心」が生まれ、「安心」から「感謝」が生まれて「幸せ」になる——大江田さんはこう結びました。



「極楽」「贈与」「祈り」をめぐって

皆さんのお話を受けて戸松義晴さんがコメントします。「古市さんの『他人に嘘をつけても、自分にはつけない』とは、ありのままの自分を受け入れる、ということかと共感します」「小川さんのお話に倣って、僧侶も地域の人たちと『贈与』の精神で一緒にやっていきたい、と意を強くしました」 「大江田さんの話には、私の教えとか合理性からではなく、まず自分が心の安らぎを感じることから幸せが始まるのでは、と思いました」 その後、哲夫さんの巧みな質問で座談が展開します。「念仏を唱えるだけで極楽に行ける、という浄土宗の教えは今の時代にマッチしていると思うけど、極楽絵図を見る限り、それほど行きたいと思えないのは何故でしょうか」(古市さん) 「極楽とは、皆が各々の願いを叶えられる世界なのかな、と」(戸松さん)

「みんなが各々の願望を満たしても崩壊しない社会の仕組みって?…常に考えることです」(小川さん) 「自分一人だけでは幸せになれない。皆が幸せであってほしいと人は考えます。そこに祈りがあるのでは?」(古市さん) 「人の幸せを祈るときは、必ず自分の幸せも含めて祈っているはずですよ」(大江田さん) 最後に全員が、「幸せとは何か」を一言ずつ述べました。古市さん……死ぬときに「思い出したい瞬間」をたくさん持っていること。小川さん……自分も他人もままならないもの。その「ままならなさ」を楽しめたら。大江田さん……自分が今ここで、幸せだと感じられることが「幸せ」。戸松さん……幸せは、人との関係性にある。もちろん、亡くなった人との間にも。そして戸松さんの提案で、ご来場の皆さんとともに、東日本大震災の犠牲者に10秒間の祈りを捧げ、お開きとなりました。

